令和４年度　第４回白馬高等学校学校運営協議会　議事録（概要）

１　日　時　　令和５年（2023 年）２月 13 日（月）９時 30 分～11 時 30 分

２　場　所　　白馬村保健福祉ふれあいセンター２F 学習室

３　出席者　　委員 12 名（欠席：富原委員、草本委員）
この他、長野県教育委員会より２名
（高校教育課主幹指導主事　山岸　明 氏）
（　　同　　主任指導主事　有坂清明 氏）
白馬村関係者２名、小谷村関係者２名
白馬山麓事務組合白馬高校支援係２名
白馬高校魅力化コーディネーター
白馬高等学校教職員２名

４　次　第

（１）開会の言葉（井出敦白馬高校教頭）

（２）長野県教育委員会挨拶（山岸高校教育課主幹指導主事）
○先週前期試験が終了し、国際観光科では前期の定員を超える応募があり、県教委としても喜んでいる。新たな提案もあると聞いているが、今年度委員の定数を増やした成果のまとめや来年度に向けた活発な議論を期待したい。

（３）審議事項
＜井出教頭＞
○学校長からの挨拶は、後の報告の際に合わせて行う。これより会議に入る。白戸会長に議長として会議の進行をお願いする。

＜白戸会長＞
○議事に入る。まず学校から報告をお願いする。

①学校より報告
＜関校長＞
○先月、県教委の再編整備計画[三次]が確定になり、令和５年５月１日以降、本校も 161 人を２年連続下回ると再編対象になる。今年度当初から２年間かけて 161 人を上回ることを目標にして取り組んできたが、瞬く間に１年が経とうとしている。かつて再編の危機にあった当時を思い起こし、白馬高校を盛り上げていく大きなうねりを地域の中に作らなければならない。本日の会議は今年度の総括とともに、新年度早々からの生徒確保の取り組みを議論するための「スタートの会」として活発な議論をしていただきたい。
○今年度の目標は「募集活動の強化」と「学校の魅力向上・生徒への支援」の２つ。
○再編基準該当の回避については、令和５年度の５月１日は難しいが、令和６年度には実現させたい。
○今回の前期選抜で国際観光科が募集定員の 30 人を超えるのは４年ぶり。後期選抜はこれからだが１人でも多く確保したい。
○２つ目の目標に関しては、ホテル実習の実施や国内外の交流活動、県からの財政支援を受けた断熱プロジェクトなどが実現できた。資料中の項目について○や◎は、計画通りまたは計画以上に実現できたと学校が評価したことを示す。
○学校評価アンケートでは、生徒からは「地域連携」「生徒を大切にした学校運営」「わかりやすい授業」の３項目ともに良好な評価を得ている。保護者からも、学校の様子は様々な情報発信により良く理解できていると評価されている。保護者からの質問要望に対しては、別添のとおり文書で回答している。現状を知るのに役立てて欲しい。
○進路については最終確定ではないが、現時点で 48 名のうち 22 名が４年制大学に進学する。
○生徒数の確保が最大の目標であり、これからも運営協議会を核として活動に取り組んでいきたい。

＜白戸会長＞
○学校からの説明について質問、意見はあるか。（質問、意見なし）
○続いて、白馬山麓事務組合から報告をお願いする。

②白馬山麓事務組合より報告
＜松澤局長＞
○事務組合からは、本年度の活動状況報告と公営塾の特進クラスについて報告する。
○全国募集の活動状況は、基本的に「地域みらい留学」を中心に学校説明会を行ってきている。
○独自で行った対面の説明会は、銀座 NAGANO で３回行い、12 組 21 名の参加があったが、名古屋・大阪では１組２名の参加に留まった。地域みらい留学を通じた活動では、対面で実施した東京合同説明会に 18 組 31 名が参加。オンラインは合同説明会でのべ 240 名が視聴している。白馬高校単独のオンライン説明会には 81 名が参加。令和３年度と比べると、対面で実施できたこととが大きい。また、在校生徒による学校紹介のビデオが好評であった。
○ここ２年間、関西方面からの受験生がいなかったことを受け、関西方面の中学校で本校への進学実績のある学校に出向き、情報交換と学校説明を行った。さらに、野沢温泉村で行われた全国中学校スキー大会に関西方面から出場した選手の宿舎を訪問し、募集活動を行った。大阪の中学生の宿に行くと高校でのスキーをしたいという相談を宿が受けているという情報を得たので、スキー部を活用した関西方面の募集活動を視野に入れていきたい。
○令和５年度の学校説明会の日程は別紙のとおり計画している。
○後ほど見ていただくが、プロモーションビデオの試案が出来てきている。
○公営塾では、特進クラスを知らない人が多いので、チラシを作成し特進クラスの見学会を予定している。
＜白戸会長＞
○白馬山麓事務組合の報告について、質問、意見はあるか。
＜浅原委員＞
○大学進学に関わって中学生は高校からの進学先を気にしている。特進クラスから一般入試と総合型選抜でチャレンジした生徒の進路実績について教えてもらいたい。
＜松澤局長＞
○公営塾の講師と担任と情報共有を行っていく中では、基本的には総合型選抜の形態が多いと聞いている。公営塾の特進クラスから一般入試に挑戦しているが、まだその結果は出ていない。（３月現在、４名中推薦入試３名、一般入試１名合格）

＜白戸会長＞
○このほかに質問、意見はあるか。無ければ続いて私から提案をしたい。
○ワーキンググループに関する資料を見てもらいたい。私自身、国際観光科を持つ新生白馬高校の取り組みに関わってきた。他の高校でも出前講義をしているが、白馬高校は県内の他校では見られない先生方の大きな努力や地域の支援で、進学や学力向上、地域との連携を含め成果をあげてきており、白馬高校への印象も変わってきている。しかし、大北地域だけではなく、全国の子どもの数が減少しており、このまま何もしないわけにはいかない。大学では一般入試よりも推薦入試で入学する学生の方がよい成績を修めており、入試の形態も変わってきている。この先、大学は半分がなくなると言われており、生き残りを目指すのは大学も高校も同じである。
○今年度から深い議論がされているが、さらに具体的に入学者数を確保する方法を考える必要があるため、ワーキンググループを立ち上げ、令和６年度入学生の募集に間に合うものを具体的に打ち出したい。そこで、白馬高校の存続と生徒数の確保に向けて「全国募集グループ」と「将来構想グループ」の２つのワーキンググループを立ち上げることを提案したい。
○「全国募集グループ」は、寮など安心できる生活環境、スキー部の募集強化など、すぐ実施できる活動と広報についての検討を行う。広報活動を５月から始める予定であるため、４月中旬にはまとめられるようにしたい。
○「将来構想グループ」は、中長期の白馬高校の在り方について、新しいビジョンを検討し、具体的な方策について議論したい。斬新で国際観光科設立時のようにインパクトがある大きな改革を考えたい。中高一貫教育の可能性を含めた中学校との連携や地域連携教育について議論していく。また、問題を抱えた生徒など多様な生徒の学びの構築など、新しいニーズについて考えていく。さらに、ウインタースポーツや登山、マウンテンバイクなど白馬ならではの特色を生かした学校づくりなど、

広く検討課題としたい。スケジュール的には、全国募集グループよりは余裕があるが、５月中旬までに取りまとめたい。

〇場合によっては、さらに小さなグループに分かれて取り組むことが必要となる場合がある。私と校長はグループの外に配置する。年に３回の運営協議会では議論が足りないため、ぜひご理解いただき協力をお願いしたい。この提案について、ご意見をいただきたい。

＜丸山委員＞

〇スケジュール的にできるだけ早く動いた方がよい。

＜白戸会長＞

〇早急に行うべきものについてはできるだけ早く行い、時間をかけて検討すべきものと種分けをしていく。本日の会議が今年度の最後の運営協議会ではあるが、今後頻繁に意見交換の場を設け、できるだけ早く行動に移したいと考える。まず、このワーキンググループの設置について、教育委員会の見解を聞きたい。

＜山岸指導主事＞

〇ワーキンググループの設置がここで了承されたものとして答えさせてもらう。学校運営協議会の運営については、教育委員会の規則で決められており、先般も定数について規則改正を行ったところだが、ワーキンググループについては、規則には書かれていない。そこで位置づけとして、当面３回ないし４回の運営協議会に付属する会議として行っていただき、改めて必要となれば規則改正を考えたい。

＜白戸会長＞

〇ワーキンググループという規定がないため、相談させていただいた。委員の皆さんに負担をかけることになるが、今回の提案通り進めて行ってよいか。

＜柴田委員＞

〇大変よいと思う。期限が決まっていることなので早急に進めて欲しい。

＜白戸会長＞

〇ワーキンググループ設置について承認いただいた。この後、グループごとに集まっていただき、今後の進め方、開催日程について検討していただきたい。11 時をめどにお願いしたい。まとめ役はグループごとに選んで欲しい。

【全国募集グループの討論】

＜太田委員＞

〇全国募集だけでなく、白馬・小谷両村の中学生に来てもらいたいので、そのために白馬高校の良さを知って欲しい。４月中にはある程度まとめて魅力を発信していきたい。どのように進めていけばよいか意見を出してもらいたい。

＜笹川委員＞

〇全国募集はもちろんだが、地域に情報を発信することはすぐにできること。中学校の保護者向けに定期的に情報をどう伝えていけばよいのか、具体的にあげてみたい。明日、中学校で公開授業があるので、公営塾特進クラスの案内チラシを保護者に手渡したい。

＜丸山委員＞

〇このような情報は随時配布していただければありがたい。

＜太田委員＞

〇公営塾について紹介すると、知らない保護者がいる。小谷も白馬も有線放送で「白馬高校チャンネル」を制作してはどうか。村の人は良く見ているし、高校生の生き生きしているところを見てもらいたい。

＜丸山委員＞

〇白馬高校の話題は、広報白馬に月に１回載せているが情報が限られる。ユーテレとしてもネタが欲しいところだからよいのではないか。

＜太田委員＞

〇毎週定期的な時間に放映できるようにしたい。

＜柴田委員＞

〇一度話を進めたことがあるが、両村にまたがると誰が取材や撮影をするか、費用はどのようにするかといった課題があり、実行に移せなかった。

＜太田委員＞
○撮影するのに、費用がかかるのか。
＜柴田委員＞
○こちらの要望を伝えて編集をするとなるとかかるようだ。また、なぜ白馬高校だけという人もいた。
＜太田委員＞
○そういう人がいることは知っている。私たちは白馬高校の魅力を伝えたいだけ。子どもの平等ではなく、地域に残そうという思いからこの会がある。今の立場はどうやって魅力を発信していくかを考えること。最初にユーテレが出来た時、白馬中学校や白馬高校の生徒による情報発信のクラブができないかという話をしたこともある。当時の担当はやりたがっていた。
＜中村委員＞
○やるということは、課題をクリアにすることだ。白馬高校を支援していることは、村民全員がわかっていること。生徒による発信というのは DVD などを作成して流すこともできるが、ケーブルテレビの活用は非常に良いことだと思う。
○常に言っていることだが、ぜひ同窓会の力を何らかの形で借りたい。
＜太田委員＞
○今課題を出しておいて、４月中旬までには次のスケジュールを組まないと間に合わない。様々な意見を出して、それをみんなで精査し実現に向けて動いていく。全ての委員が動かないといけない。皆で責任を持って進めたい。報告を聞き意見を言うだけではなく、委員自らが行動していくことが必要。
＜笹川委員＞
○銀座 NAGANO の説明会に委員が行くようにしたい。
＜相沢委員＞
○私も広報活動をしなければならないと思っている。学校の予定を確認しながら動きたい。
＜太田委員＞
○動こうにも今まではコロナで動けなかったので積極的にお願いしたい。
＜相沢委員＞
○２、３月は忙しいが、２月中に早急に動かなければならない。
＜笹川委員＞
○生徒募集については追い詰められた状況。令和６年度 161 人を確実に確保するのが私たちの当面のゴール。時間を捻出して動かなければならない。
＜太田委員＞
○令和５年の５月１日の在校生徒数は何人を予定しているか。
＜笹川委員＞
○前期選抜合格者が 45 人だから、そこに後期選抜の人数を足しても、再来年度 80 人近くを確保しなければならない。

＜柴田委員＞
○かつて人数確保で県外生を増やした弊害があった。受け入れは寮だけでは足りない。
＜松澤委員＞
○令和５年度は寮だけで受け入れられるが、令和６年度は確実に足りなくなる。
＜柴田委員＞
○寮体制をどうするかも並行して考えなければならない。
＜太田委員＞
○寮は何人受け入れが可能か？
＜松澤委員＞
○男子寮は２人部屋にして 22 人。女子寮は 19 人。個人的には、２、３人を受け入れてもらえる下宿先が複数あるとよいと思う。
＜柴田委員＞
○北海道余市高校の視察はどうだったか。
＜松澤委員＞
○余市高校には寮はなく下宿の受け入れだけで、費用は７万円ほど。下宿の受け入れ人数は３人から

10 人くらいのところまである。下宿を受け入れる側の高齢化が問題になっていた。生徒は３か所くらい内覧して下宿を選ぶ方式。一覧を載せた下宿のチラシで募集している。

＜太田委員＞

〇まずはそれに悩まないといけないくらいの生徒数にするにはどうしたらよいかということ。

＜中村委員＞

〇これからの高校と中学校のスケジュールを手に入れる。寮の関係は令和６年度に 80 名の入学者数を目標とすると、内訳はある程度決まってくる。寮が使えるのはこれくらい。下宿はこれくらいと。私が就任したとき下川村長に聞いたら、始めたとき下宿先はいくらでも見つかると思っていたが、実際は違った。受け入れはこういうメリット、デメリットがあることを示して、受け入れ先を決めないと募集できない。

＜太田委員＞

〇今日は多くの意見をランダムに出していただき、次の会議ではどうしていくかをまとめ、それまでに資料を整理しておく。学校のスケジュールはすぐわかる。私たちは議会があり、村長にも予定がある。今後の日程をある程度決め村長に示して、出られるところに出てもらう。

＜丸山委員＞

〇寮や下宿の説明を銀座 NAGANO でできる状態にしておかないといけない。私は２回参加したが、現場でアドバイスもした。事前にこういうプレゼンをするというものを委員に見せてもらえれば、皆さんの意見が入ったいいプレゼンができる。資料を早めに集め委員に共有して欲しい。

〇対外的に銀座 NAGANO や名古屋・大阪でやるということを広報しなければならない。白馬村の SNS はフォロワーが多いが、今回はタイミングが合わずできなかった。出張を無駄のないようにしたい。

＜太田委員＞

〇私たちもどんな内容を説明しているのか見てみたい。５月 28 日に銀座 NAGANO で行うということなので、５月上旬に確認する場を設けたい。

〇小谷もそうだが、学習旅行で関西の中学生がスキーよりも田植えでやってくることが多い。観光協会から情報をもらい、白馬の子と交流するのはどうか。また、白馬中学、白馬高校が SDGｓに先進的に取り組んでいるというのは全国的に知られている。そういう勉強をしたいという中学校も来る。そういうところへ白馬高校の生徒が行って話をすると、白馬高校へ来たいという子もいるのではないか。

＜松澤委員＞

〇昨年は 72 校が白馬小谷地域に学習旅行に訪れたと観光協会から聞き、学校パンフレット等を発送した。またこれまで白馬高校に入学している生徒の出身中学に行ったが、大阪の中学校では探究を積極的に取り組んでいるところは少なく、進学先は近くの高校へ行く生徒が多いと言われた。全国中学校スキー大会の期間中に大阪の中学生が宿泊している場所に行った際、宿の方が中学生からスキーを続けられる進学先について相談を受けたと聞いた。中学校でどのような活動に力を入れているかを調べ、一定の学校にターゲットを絞る方がよいのではないか。

＜太田委員＞

〇観光協会の情報で探究学習を熱心にやっている学校には白馬高校が先んじているのでアピールしやすい。

＜松澤委員＞

〇全国募集をしている学校はどこも探究学習に力を入れてやっているので、白馬としては、一番の特色としてスキーや山岳を打ち出した方がよい。

＜中村委員＞

〇スキーは外せない。飯山高校はスポーツに特色があるため、棲み分けも必要。現存のアルペン、クロスカントリー、コンバインドもよいが、基礎スキーやインストラクターを目指す生徒がいてもよいのではないか。そのために地元の人たちや同窓会の力が必要になる。

＜太田委員＞

〇協力のお願いという意味で、本委員と同窓会の親睦をはかりたい。白馬小谷村内には、元スキー選手を含め、白馬高校の卒業生が大勢いる。スノーボードや基礎スキー、フリースタイルにおいても有名な方がいて、生徒が憧れる人たちもいるのではないか。以前、寮に行った際、スキー未経験の寮生に対して基礎スキーを勧めた。デモンストレーターの話をするとその方の名前は知っていて、卒業生として紹介し話してもらったら、寮生は大変喜んでくれた。

〇そろそろ時間となるが、次回はいつ集まれるか、日にちと時間帯を決めたい。

〇次回は２月 26 日（日）16 時から、公営塾で行うこととする。

○それまでの分担として、ユーテレは太田、同窓会関係については笹川委員、中高の年間行事予定は松澤委員がそれぞれ次回持ち寄ってもらいたい。

＜松澤委員＞

○今後、生徒に作らせたTikTok動画のコンテストを企画したい。

＜太田委員＞

○やるべきだ。学校が楽しいということが伝わればよい。卒業式、入学式などの行事に、上村愛子さんや渡部暁斗さんに来てもらってはどうか。有名な卒業生に協力してもらって盛り上げたい。

＜松澤委員＞

○スキー部の顧問はアルペンやジャンプ、クロスカントリーが専門。他のフリースタイルやスノーボードには顧問がいないので、大会の申し込みを生徒自身が行いエントリーミスが起こることがある。コーチをお願いし、毎週または月に数回来てもらい、技術面だけでなくその他の支援も充実させたい。

＜笹川委員＞

○スキー部OB会は、３月の五竜とおみの村民スキー大会にOBチームとして参加する。

＜丸山委員＞

○私も出ます。

＜太田委員＞

○この大会は早いチームが勝つのではなく、３人１組のタイム申告制だから誰でも参加できる。武田委員たちが、着物を着て一本杖スキーやっていたこともあった。白馬高校の生徒にも出て欲しい。

＜笹川委員＞

○他にも村内で団体戦があれば、都合をつけてスキー部OB会として参加していく。

＜中村委員＞

○よい取り組みだと思う。

＜太田委員＞

○両村長も仮装して出てください。ぜひとも盛り上げて行って、最終的に５月15日頃までに、具体的な案を提示できるよう持っていきたい。委員の方は、多くの方から意見を聞いて持ち寄ってもらいたい。

【将来構想グループの討論】

＜武田委員＞

○将来構想委員会ということだが、今すぐ対応できることとして、先日校長先生との話の中で、他者とのコミュニケーションが苦手であったり、勉強についていけなくなると通信制へ転学する生徒が増えていることを聞いた。このような生徒を少しでも引き留めておけるように、中学校で言えば支援級というものを公営塾とは別に作ってはどうかと思う。子どもたちが多様化していて集団の雑音の中で学ぶことが苦手な生徒もいる。少人数の別教室を設けたら続けて行けるのではないか。

＜浅原委員＞

○今特別支援学級に関わる話が出たが、制度上、高校では特別支援学級は無理だと思うが、通級指導教室であれば高校でも可能で、実施している高校もある。今いる生徒が辞めないというのは当然大事だが、より多くの子が入る白馬高校にしなければならず、サポートとしては通級指導の制度を利用すればいい。

＜出口委員＞

○全く同感で、高校に特別支援学級があればよいとは思うが、中学校では、高校には特別支援学級がないから、普通高校に入っても対応できる力を中学でつけようと今までやってきた。多様な生徒が多く、N高が日本一の生徒数をほこる学校になり、長野県でも様々な学校が設立され、時代の流れを感じる。小谷中では中学時に人間関係が心配な生徒がいたが、先日白馬高校の授業参観をしたら、生き生きしていて、白馬高校で自分の居場所が見つけられたと思った。中学の担任の先生たちもそれを見て、白馬高校の良さを感じ考え方が変わってきている。多様な生徒を小集団で育ててもらえるところも白馬高校の魅力の一つだと思う。

＜武田委員＞

○そこはアピールできる。白馬高校で今後通級指導制度の活用を検討していけたらよい。

＜浅原委員＞

○通級指導制度は高校で運用できる。今では一般的になっている。授業カウントは高校で工夫する必要はあるが運用は可能でよりきめ細かい支援ができる。

＜武田委員＞
○それを聞いて安心した。
＜出口委員＞
○特別支援学級だけでなく、人間関係で小中時代につまずいて学びが止まっている子が学び直しできる学校が各地区であるが、白馬高校も学び直しができるような側面があれば、中学校の教員としてはありがたい。
＜武田委員＞
○小学校の勉強ができていない子にも細かく手をいれているということだが、その点をどうアピールしたらよいか。それが周知されていれば安心して来られる。そのような生徒は自分の居場所がないと学校に来られない。
＜出口委員＞
○本校の場合は、白馬高校と交流し教員同士が情報共有し周知しているため、困ったときには白馬高校にお願いしようという信頼関係がある。大変ありがたい。
＜浅原委員＞
○今の点に関していうと、白馬中は柔軟な指導をしているので子どもたちが生き生きとして育ちそういった生徒が白馬高校にも入学している。白馬小谷地域は白馬高校が手厚く指導してくれるということを理解しているので、その点を、大町地区をターゲットにしっかりとアピールしていかないといけない。
○話題は変わるが、前期選抜で白馬高校に 18 人決まった。例年に比べて多い。おそらく、校長、教頭や白馬中出身の在校生が説明に来た影響だと感じる。白馬高校に前期選抜で合格した生徒の中には、成績上位者がいるのが特徴。生徒と面談すると、「大学へ行くために岳陽に行く」と答える生徒が多いので、その点から白馬高校の進路実績をしっかりアピールして欲しい。今年度、慶応や早稲田に合わせて３人合格しているということは大きいので、中学生のニーズに対し、具体的な大学名を伝える情報は高校生ホテル以上に魅力がある。そこを大事にして欲しい。
○以前話したが、一時的な連携やイベント交流ではなく、教育内容で繋いでいかなければならない。例えば教育特区申請をしてサスティナブル科とか探究科などで繋げば、白馬高校の価値も高まるし、白馬中としても送りたくなる。教育特区とまで行かなくても、大町には中高連携教員がいるが、それは大町市で雇っている。白馬にはそれがない。イベントで繋がるのはどこでもやっているので教育内容で繋がなければならない。大きな改革だが、やろうとすれば２、３年以内でできる。
＜武田委員＞
○中高を通して何を学ぶかと言うことが大切だ。
＜浅原委員＞
○何を核として白馬で生きていくのかということ。白馬高校の実践や取り組みもそういう部分が必要。探究と言っても何を探究するのか。持続可能な白馬、未来という視点で、教科名は何でもよいが、柱とするもので小中高が繋がり、白馬高校に行きたくなる仕組みを作らなければならない。それが核になると白馬の地域の価値が高まる。手始めに中高交流教員を置いて、その人が中心となり中高を行き来し何が白馬に大事かを行政とすり合わせたうえでコーディネートする役を担っていくことはどうか。
＜出口委員＞
○中学校で今困っているのは、令和７年度末までの土日の部活動の地域への移行だ。小谷中も陸上とスキーと吹奏楽があるが、地域に指導者がいないことに加え小さい学校であるため部員数が少ない。吹奏楽は現在白馬高校を含めた３校合同で活動している。同様に、バドミントンなども白馬高校が拠点となり、土日に地域の方が指導し白馬小谷の中学生と合同して行うことができれば、交流が生まれ白馬高校への進学に結びつくのではないか。
＜武田委員＞
○核となるもの、これがあるから白馬小谷で小中高が連携できるというものを考えたい。例えば山岳など魅力的なものをうまく小学校から教育の中に入れられたら、山岳ガイドや救助隊の方向につながる。バドミントンをする子が増えてきているので、スキー競技や吹奏楽を含め合同で活動していく中で、白馬高校へ行こうという気持ちになってくるのではないか。それに対してサポートしていく指導者が必要になってくる。
＜浅原委員＞
○名前は何でもいいが、中高交流教員として白馬中・小谷中・白馬高校を兼務できる先生がいれば、必要な課題を共有し、今の状況を改善するだけでなく、長中期的な地域づくりという視点からも役

立つ。教育特区になればあらたな教科が認められるので、思い切って理科と社会の時間数を削って探究科などを作ると教育活動がつながるので、他地域との差別化が図れて価値が高まる。そのために繋ぐ人が必要。

○両村が共同で一人雇って、中高の両方を理解したうえで一貫性のある教育内容を構築したり、部活動的な視点からも調整を行うなど、一歩先を見据えることが必要だ。白馬高校が存続できるかが鍵でそれがならないと一時的にやっても難しくなるのではないか。

＜出口委員＞

○教育特区はハードルが高い。菅平中学校にいたときに、スキーの教育特区になったが、そのためのエネルギーがとても大変で他の学校とは区別化されるが、生徒や家庭によって対応が異なる。やるとしたら勇気のいる決断だ。例えば今は白馬高校にいた先生の指導のもと、環境に関するフィールドワークを行い高校生と交流しているが、このような取り組みをきっかけに白馬フォーラムに小谷中の生徒を参加させてもらいたいし、逆に小谷中の発表会に来てもらいたい。

＜浅原委員＞

○できるところから交流し、一緒に活動する取り組みはすぐにできるので来年からやっていきたい。

＜出口委員＞

○思い切ったことは私立高校でないと難しい。

＜浅原委員＞

○菅平は英語も特区で、またスキーの科目もある。しかし、菅平の場合はそれをやったからといって中学校の存続とはあまり関係がない。

＜出口委員＞

○高校もこれからそれぞれの学校が入試において特色を出すことになっている。

＜浅原委員＞

○先生が異動すると中断することがあり、持続可能にならない。

＜武田委員＞

○そのような役割は教員免許が必須であるのか。

＜白戸会長＞

○それは、やりようで、これが出来ないからダメというところに持って行かないで、何をやるかを考えるのが先で、それを実現するには何が必要かと考えた方がよい。

○地域づくりというのは大事だが、実は中学校から高校へ行く段階で、通学する地区が変わるため中学までに構築した地域との関係性が断絶する。高校では観光からは導入しやすいが、地域に古くからいる方にはアプローチができてないのが課題。高校にとっては中学校との連携が入ればそれがケアできるため両者にとってプラスの関係になる。

○中学校から高校にかけての時期が人生において地域との関係を決定する時期だ。人材育成は中学から少しずつ育んでいくのがよい。先生方の話に出たように具体的なところから始めることが現実的で大事。大学も高校と協定を結ぶが、みなイベント的で出前授業や見学からは何も生まれない。

○一方、商業教育研究会で大学と商業高校と結び１年間継続して行うプログラムがある。参加者の２割ほどが本学に進学し商業の免許を取得し、ここ数年で６、７人の卒業生が商業の教員として高校で指導をして繋がっている。

○運動部でも世代ごとに異なる指導者ではなく、小中高連携することで生徒や指導者にとってよい結果が生まれると思う。

＜武田委員＞

○今すぐできることとして、中高の交流を深めて行くということか。

＜白戸会長＞

○とりあえず何かやろうではなく、先を見据えてモデルとして動かしていくイメージ。

＜浅原委員＞

○探究的な視点でつながろうとすればわりと価値が共有されやすい。白馬高校が発表するところに一緒に入れてもらうと何らかの価値が共有できる。

＜武田委員＞

○出口委員が発言した環境の中高交流の学習は継続しているのか。

＜出口委員＞
○そうだ。地域から学ぶと言う点は同じなので、小谷中は小さい学校であるので、フォーラムのような多人数の前で発表させてもらえることはありがたい。
＜武田委員＞
○大勢の前でやるとプレゼンの勉強にもなる。お互い見せ合う場も必要になってくる。
＜出口委員＞
○小谷中でも、保護者や交流している千葉県の白子中学校に向けて、プレゼンする機会を作っているので、白馬高校と一緒にやることになっても負担ではない。
＜白戸会長＞
○村が、白馬はこういう人材を育てていくというポイントを絞れればやっていける。
＜武田委員＞
○地域あげて中高が同じ方向を向いていくのをバックアップできればよい。
＜浅原委員＞
○それによって白馬高校に行く理由が生まれる。今のイメージでは、岳陽に行って大学に行く。白馬にいく子は他所から転校してきた子だ。全中スキー大会で６人も入賞しているが誰も白馬へ行かない。県外や飯山高校に行く。どう考えたらよいのか。
○このほかに、中長期で気になっているのは通信制だ。この先、考えておかないといけない。Ｎ高が短期で日本一の学校になっているのは、高校観が変わってきているため、通信枠の生徒も何人か確保できれば、学校に行きたくなくても辞めなくて、家からでも授業参加できる。こういう考えを先のことと思っていると手遅れになる。
＜武田委員＞
○そういうことを取り入れていくにはどう考えたらよいか。
＜山岸主幹指導主事＞
○すぐできればよいが。コーディネーターの話が出たが、要求しても予算が付かない現実がある。すぐにはできず３年間ほど検証をしないと進められない。
＜浅原委員＞
○長野県としても遅れるわけにもいかないから、一度動き出すとテンポが速いであろう。その時乗り遅れないように、チャンスがあればすぐに実行できるイメージを持っておいた方がよい。
＜白戸会長＞
○大学では授業をライブ放送で聞けるというのは当たり前になってきた。TEAMS を使って目の前の学生と遠隔の学生に対し同時に授業したり、互いにディスカッションしたりするノウハウは身についている。学生には通信設備費用を補助している。
＜浅原委員＞
○白馬中は冬の多くの日に、コロナやスキーで登校できない生徒に対応して、すべての授業でオンラインと対面の併用をしている。
＜白戸会長＞
○画面を見ながら学生を指導するのが日常的になっている。
＜浅原委員＞
○きめ細やかな指導という武田委員の視点の一つに、オンライン的なサービスなど、一歩先の通信制のような形態はチャンスがあればすぐに実行できるようにするべきだ。
＜白戸会長＞
○大学はここ２、３年文科省が運用規則を変えており、７年に一度文科省の外部評価が入り、出席簿と成績の提出が義務付けられ、適マークが無いと補助金がもらえない仕組み。
＜山岸主幹指導主事＞
○オンラインが主流となり縛りが無くなると、学校とはいったい何だろうということになってくる。子どもたちが一堂に会することにどんな意味があるのかが問われている。
○浅原先生から非常に興味深い話があったが、特別支援の話や大学進学の話という両端の話で、学校が小さくなってさらに多様化に対応しろという厳しい話だ。今のままのスキルではできないので、地域に助けていただかないといけない。
○白馬高校存続となると出来るだけ白馬に入ろうとなり、まるで義務教育 12 年として地域で育てることになる。高校が県立で中学校が村立だから、やはりそこの連携の話は妥当と思う。
○教育特区まで行かなくても、「連携型の中高一貫校」がある。
○新しい時代の課題が多くやることが山積しているが、白馬高校は地域高校のフロントランナーとし

て県も大事に考えている。
＜関校長＞
○高校の普通科改革の流れが全国で進んできて、学際的な学びと地域協働の学びの２つが示されている。
○１つはやはり地域としてどういう子が育って欲しいのかということがはっきりすれば中学校からの流れが見えてくる。地域協働の学びは、普通科でも国際観光科でもできるようにしてある。
＜浅原委員＞
○流れと核が見えてくるとみんなが乗りやすいが、そこの核をすり合わせるのは簡単ではない。
○教育委員会主導という話になるが、教育委員会といっても現場をよく知らないと、今までやっていることで手一杯。この地域として何を核として教育内容を作っていくのか。
＜出口委員＞
○１つは探究。この地域の課題があって行政的な課題とも一致していて、それを中高と継続して学べる。
＜浅原委員＞
○継続が大事。そうすれば、必然的に白馬高校へ行くようになる。
＜白戸会長＞
○おそらくそれが大学進学にもつながる。どこの大学も推薦入試を多くしているのは学生募集という意味だけでない。一般入試では通信制から来た学生が成績上位者の多くを占めるが、大量に退学していく。顔を見て面接しているのはそこだ。東大も推薦を増やしているのはそこで、社会に出て活躍できるためには、きめ細かく一人ひとりに合わせて育てることしかない。白馬の子がしっかり育てられていると大学も社会も受け入れやすくなり、地域の子どもの育て方のビジョンも見えてくる。
○全日制から通信制に転学している子は、例外はあるが優秀な子が多い。しかし、その先がなかなかうまくいかない。
＜武田委員＞
○うまく人とのコミュケーションがとれないということか。
＜白戸議長＞
○とれないことが多い。
＜関校長＞
○そういう子は高校でも苦しい。どうしてこんなにグループワークをさせるのだとの声も聞かれる。１つの教室の中に多様な学びの形が同時進行できるのが理想だ。
＜武田委員＞
○美麻小中学校は特認校なので、大町市内のどこからも入ってこられるが、そういう子しか来ない。授業は対話型、協働の学びをしているが、自分のことを否定されたら嫌という子が多くいる。「そっとしておいて欲しい」といわれたら「はい」としか言えない。だが、そういう子も高校には行きたいと思っている。ではどうするのかというと、まずは安心できる場を作ることだ。
＜関校長＞
○中学から通信制高校に行こうと思っていたが、全日制にチャレンジしようと思って入学したという生徒が毎年何人かいる。１年ほどたつと、授業に不満があるというわけではないが、人の中にいるのが嫌だと言い、教室に入れなくなる。そこで通信制に行くという選択をするわけだが、何とか外に行かずに頑張れる環境を用意してあげたい。しかし、20 人の教員であれもこれもやれというのは苦しい。
＜浅原委員＞
○通級であれば一人加配がある。通級で柔軟にオンラインを活用できる。
＜関委員＞
○村費で配置ができ、中高にまたがって授業してもらえればうれしい。
＜浅原委員＞
○村費でやってもらえると、中高も繋ぎやすい。教育経験があって、先験的なビジョンを共有できる人物がよい。
＜白戸会長＞
○このあたりで次回の予定について考えたい。
＜武田委員＞
○３月の第２週あたりで日程を調整したい。

＜白戸会長＞
〇両グループの話合いの様子を報告願います。
＜太田委員＞【全国募集グループ】
〇全国募集グループの共通認識として、５月中旬までにしっかりと具体的にまとめていきたい。運営協議会の日程だけでは足りないので、今日出た多くの意見を整理し資料を持ち寄り、次回の２月 26 日（日）16 時に公営塾に集まりたい。
＜武田委員＞【将来構想グループ】
〇中高の交流はすでに実施しているのでそれを深めていけたらよい。
〇地域の課題として何を大事にするか、小中高一貫して探究していくことが大事で、それを核として小中高が繋がっていける。
〇きめ細やかな支援を行うために通級指導教室を入れてはどうか。多様化している生徒が増えてきていることに対応し、通信制も視野に入れておく。そういう時代になったときにすぐ対応できるようにしておく。
〇大町方面の中学にもきめ細やかな支援をしていることを PR した方がよい。
〇地域に根差してどう活動したらよいかを考えて、次回会議は後期選抜を避けた３月の第２週くらいに日程調整して集まりたい。
＜白戸会長＞
〇学校の PR 動画の試案が用意してあるので見ていただきたい。

PV 動画上映（約５分）

＜白戸会長＞
〇本日の協議はこれで終了とする。
〇PR 動画を見てのご意見は事務組合にいただきたい。

（４）閉会
＜井出教頭＞
〇連絡が２点ある。
〇学校自己評価が妥当であるか外部評価アンケートの提出をお願いしたい。
〇来年度第 1 回の運営協議会は、例年６月開催だが、４月中の開催を予定している。皆様方の任期は令和６年４月 30 日までとなっているので引き続きご協力をお願いしたい。

以上